



2ちゃんねる発の純愛物語

なかのひとり 中野独人「電車男」

真の意味でのノンフィクションの誕生

2004年 10月 22日
新潮社刊 本体定価 1300円

心の底から人を応援し
その成功を手放して喜べる体験ってしました？

『電車男』という本についてのレビューなのに、著者の「中野」という名前の一致だけで、いきなり「バイク男」の話を始めてもいいだろうか？

時はいま、西暦二〇〇四年。ほんの二十年前に、バイクブームがあつて若者がこぞってバイクに乗りたがり、尾崎豊が「盗んだバイクで走りだす」と唄う詞がリアルだった時代があろうことなど、ほとんどの人は忘れ去っている。ヨーロッパのように文化としてモータースポーツが成熟していない日本において、バイクはまだ「車を買えない人の乗り物」でしかなく、経済成長しつくした日本では、配達業務以外のバイクなんてほとんど走っちゃいない。そのところ、四輪と二輪は違う味わいをもつた乗り物で、優劣の概念をもちこむのはナンセンスであると理解しているのは、さすが欧州貴族の末裔たる人たち。競争馬をエンジン付きの二輪車に置き換えても、同種の愉しみを見いだす余裕と優雅さはさすがだと思ふ。一方、資源のない敗戦国・日本は必死である。少しでも上のクラスへ、という想いが強すぎて、一九六〇年代にレースでヨーロッパを制し、世界一のバイクメーカーとなったホンダの創始者をもつてしても「次は四輪で世界を」という欲望から逃れることはできなかった。F1レーサーの佐藤琢

季刊 **ブックレヴュー**

青木敬士

磨が三位表彰台に登っただけで大きな話題になるのに、バイクのトリアルで今年度世界チャンピオン（F1で言うM・シューマッハと同じ立場）になった藤波貴久の名を知っている日本人がほとんどいないのも、この国がまだまだ抱え続けるコンプレックスと表裏一体の、空虚な上昇志向のせいであるといつても過言ではない。ここ十年だけを見ても、坂田和人、原田哲也、加藤大治郎といった世界チャンピオンを輩出しながら、不当に軽視されているバイクレースの世界だが、それゆえ、熱心なファンの応援には力がこもる。「自分がこの選手たちの凄さを理解してやらずに誰が認めてくれるんだ！」という想いがあふれているのだ。

そんな想いを一点に集めるような「事件」が九月十九日・モトGP第十二戦日本グランプリで起きた。昨年度まで「テレビに映るのはトップの選手に抜かれて周回遅れになる時だけ」と言われ、異次元の遅さで失笑の対象でさえあったチーム・カワサキに、あえて今シーズン移籍した中野真矢が、三位表彰台に登る激走を見せてくれたのだ。若く端正な顔立ちから、ネット掲示板などでは「王子」という愛称で呼ばれる中野だが、まさに駄馬を駆る王子様が悪魔と取り引きしたとしか思えない速さで順位を上げていく。「何が起こっているんだ?」「バイクが時々白煙を吹いてるぞ」「中野は死ぬ気か?」と、他の選手のファンさえ釘付けにしていく中野。カワサキ

二十三年ぶりの表彰台ゲットへいたる奇跡をいま、まさに自分が目にして……観衆は皆、そんな感慨を抱いたことだろう。もちろん、奇跡は神が気まぐれに与えてくれるものではない。中野の集中力を切らさないライディング。トップチームとの明らかに格差を意識しながらも、地道にバイクの改良に励んできたメカニックの努力があればこそ、奇跡をつかみとることができたのだ。最初から無理だとあきらめてしまっている人間は、奇跡のチャンスがあっても気づくことができない。

私もテレビ観戦しながら、我が事のように「中野すごいよ。カワサキよかつたな」と、感動の涙がにじむを感じた。心の底から人を応援し、その人の成功を手放して喜べる体験というのは、繰り返しの日常ではなかなか出会えない。ましてや読書によってそのリアルな感動を得るなどというのは、とてつもなく難しい注文なのだ。

しかし――

ここにもう一人の中野がつむいだ本がある。
中野独人『電車男』である。

「もう一人の」と表したが、中野独人は一個人ではなく、インターネット上の巨大掲示板・2ちゃんねるの「独身男性（毒男）板」に集う人たちの総称である。この掲示板カテゴリーは、もてない男性がなかば自虐的に自分たちを毒男と称し、ときに「もてないから一人で料理でもしようぜ」というスレ（カテ

なかのひとり
中野独人「電車男」

ゴリ内でさらに細分化した話題の単独の掲示板を立てて真剣に料理のノウハウを競ったり、「ほんとは女なんてこの世に存在しないんだろ」というネタスレで盛り上がりつつあり、それなりに生ぬるく居心地のよいコミュニケーション空間をつくりあげている。そんな中に「男達が後ろから撃たれるスレ」というものがあり、これは毒男にとつて嫉妬と羨望の対象でしかない「運良く彼女ができそうだった、カップル成立してしまった毒男」のノロケ話という「攻撃」を、あえて死地へ赴く兵士のように浴びに行き、自分を省みて憂鬱に沈むというスレである。

そこに今年の三月十四日、のちに電車男と呼ばれる二十二歳（彼女いない歴も同じ）のオタク青年が現れる。彼は秋葉原帰りの電車内で、女性客からむ酔っ払いのひどいふるまいを見かねて注意し、女性を救った顛末を書き込んだ。が、おとぎ話のように「勇気をふるって敵から救ったお姫さまと結ばれめでたしめでたし」という話がいまの世の中に転がっているはずもなく、女性からお礼がしたいので名前と連絡先を教えてほしいと言われただけで（それだけでも毒男には快挙なのだ）その後の展開があらうとは電車男本人もスレの住人も考えてはいなかった。

ところが二日後、助けた女性からお礼の品としてペアカップが届き、電車男はあわてる。どうすればいいのか？ そこで彼が相談に行ったのは、毒男板

のなじみのスレだった。スレ住人は「お礼の手紙を書け」「いや、手紙だとそこで完結して次に続かない。電話をしろ」と世話を焼きはじめる。そこである住人が、何の気なしに「カップのメーカーは？」と訊いたのが次のステージへの導火線になった。「HERMES だって書いてあるけど、どこの食器メーカーだろう」と素で答える電車男。住人たちは色めきたつ「それはエルメスって読むんだ。やはりそのカップには意味があるぞ」うぶで人がいいけどちよつと世間知らずな感じの電車男は、住人の指摘でやつと高級ブランドのエルメスとそのカップの銘を重ね合わせる事ができ、さらなる緊張と期待で心臓を高鳴らせる。電車男、エルメス子に電話をかけてカップのお礼を言い、さらに食事の約束をとりつけられるのか？ ……ここから二ヶ月に渡り毒男板のスレで展開した書き込みが、インタナーネットのモニタ画面から飛び出し、紙の本として物質化したのが『電車男』なのだ。

数十万人が『電車男』に感動した理由

そして

映画化が（たぶん）失敗する理由

『電車男』は、なぜこんなに共感を呼べたのだろう。本の広告が煽るように「今世紀最強の純愛物語」だから？―それはまったく的外れな見方と言わざる

を得ない。この物語が提供したのは、恋愛成就を目指すして一喜一憂を積み重ねていく内容だけではないからだ。『電車男』においてもつとも注目すべきポイントとは、「真の意味でのノンフィクション」であるという点である。

世の中には、さまざまなノンフィクションがあふれている。『プロジェクトX』のように、困難を乗り越えて画期的プロダクトを生み出す企業人の物語や、難病と闘い、短いながらも生きた証を残して天に召された子供の話など、感動実話が書店の棚から消えたことはない。もちろん、そういったノンフィクションにも感動や共感が詰まっている。しかし、それらは実話である、という点でノンフィクションたりえているだけで、読み手が登場人物に感情移入して共感するという構造は、虚構を描いた小説を読む場合と変わりが無い。

『電車男』が到達した、かつてないノンフィクションの形式とは、登場人物とまったく同じ体験を読者がしてしまうという、究極のヴァーチャルリアリティを完成させてしまった点にある。

もちろん、読者の前にエルメスのカップを贈る女性は見れない。読者のキャスティングだけは固定されていて、掲示板への電車男の進展報告や毒男板住人達の励ましをROM (Read Only Man・書き込みせず) に掲示板を見ていること) しているウォッチャーの役である。2ちゃんねるの人気スレにおいて

は、実際に書き込みをしている人数の百倍以上のROMがいると言われている。リアルタイムで電車男の行く末を見守っていたROMたちも、現実世界では独りパソコンの画面に見入っていたわけで、時間のズレはあっても、読者は本質的に同じ体験をしているのだ。これ以上のリアルがあるだろうか？

このように、ROMの現実を体験できる究極のノンフィクションという意味でなら、たとえ電車男やエルメス子が現実には存在せず、誰かが緻密につくりあげたネタをもとに演じ続けていただけだったとしても、『電車男』のリアリティが揺らぐことはない。

ネットでの電車男をめぐる一連の書き込みがまとめサイトにアップされ、それが『電車男』という本として出版されるに及んで、もともとこんな感動純愛ストーリーなどより、悪意が渦巻く足の引つぱりあいがかわしい2ちゃんねるでは、『電車男』ネタ説が浮上し、いくつかのサイトで疑惑の検証がなされた。その検証を読んでいくと、真贋論争は二セのほうに説得力があるような気がする。

しかし、前述したように、『電車男』において問題にすべき「ウソ・ホント」は、電車男の実在などではなく、ネット閲覧者や読者自身の体験そのものである。リアルな共感の装置がネットという情報の器のなかに発生したことに意味があるのだ。共感の根拠となる物語が架空のものだったとしても、心を

動かされた事実が曇るわけではない。人類にとっておなじみの「神」という装置にしても、ほんとうにその姿を見た者はいないのだ。

ヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）と云えば、前世紀末にはハイテクを駆使したヘッドセット・ディスプレイの中にCGで再現された仮想世界を見て、触覚をシミュレートできるデータ・グローブで仮想物体に触れたり動かしたりすることもできる、という、二十世紀的工業主義の延長線上にあるものしか想像できなかった。しかし、実際には人間の感覚そのものが、私たちのまわりにひろがる環境そのものを、人間にとつて必要な形に翻訳して与えてくれるヴァーチャル・リアリティ・システムなのである。世界は物理的に同一のものとして存在しているが、たとえば音波の反射で世界を把握するコウモリには、異なる世界が見えているはずだ。生き物の種類だけ……さらに言えば、人それぞれの見方の数だけ世界は存在している。

そのように個別に存在しているはずの世界を、リアルなCGで緻密に構築するという方法は挫折する運命にあった。しかし、可能性は別の場所に残されていたのだ。人間のもつ環境知覚のシステムを「書き言葉」という記号で活性化させるといふ古典的方法のほうが、よりリアルな仮想空間を創出できたのである。こんな皮肉を、ネット生まれの『電車男』は突きつけてくる。

だからこそ、十月二十二日の発売から、わずか三日で五刷、十二万五千部を出荷したという『電車男』に、大手映画会社、テレビ局などから映画化に関する十本以上のオファーが届いているというニュースを聞いて、私は今から心配している。『電車男』の共感を生み出した究極のノンフィクション構造を意識せずに映画化すれば、必ず失敗してしまうだろう。もし、電車男やエルメス子の姿をまったく映さない映画を撮れるならば救いがあるが、どんなイケメン俳優や美少女を連れてきても、あるいはその逆の容姿でも、『電車男』の行間に潜む姿なきROMたちは、彼らにとつて世界の中心であるパソコンの前で叫ぶはずだ。

「こんなのはオレが応援した電車男じゃない！」
「こんなのはオレが夢想したエルメスじゃない！」
と。



2ちゃんねる慣れしていない読者のためのネット用語集は、カバーをめくった表紙に隠されている。

季刊ブックレヴュー